
波紋の勇者Re:

ループ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

波紋の勇者 Re :

【Nコード】

N4104Z

【作者名】

ループ

【あらすじ】

「僕さ、人間なんだけど……」

目が覚めたら、そこはポケモンの世界で自分はなんとリオルに！？

ギルドの一員、ピカチュウのトリルと共に始めるギルドの生活。

しかし、ある日世界は色を変えて…… ポケモンの少年達が紡ぐ、

新たな世界へ！

プロローグ

後の世に伝わる伝説にこんな一節があるそうだ。

その頃となつては、途切れ途切れの詩でしかないが。

「その者、……地より現れ、世に降り立つ。……しかしその心くすまず。闇の……かい、それを滅ぼす。見よ、その者は……」

なぜ後の世の話が分かるかつて？

それは、俺様が特別だからさ。

……そんな顔するなよ。

教えてやるさ。俺はこの伝説に立ち会ったからな。

いわゆる生き字引さ。

あれはそう、春の終わりだったらしい……

まあもつとも、俺様自身は知らない。

あいつの記憶だからな。

プロローグ（後書き）

波紋の勇者 Re :

スタートです。

改めて、よろしくお願ひします。

第1話：巡り会いは不思議で

砂浜を、一匹のポケモンが歩く。

その足取りは、のんびりとしながらも力あるものだった。

「んー、今日もお使い終わった！」

夕陽に映える黄色の毛並み。

そのポケモンはピカチュウ。

まだ若い、少年である。

「綺麗な夕陽……」

そのピカチュウは感慨深い表情で、浜辺に腰をおろしている。

「こんなとき、一緒に居たかったなあ……」

右を見ると、夕陽に照らされた町が見える。

自分の町、住む世界。

左を見ると、野生のクラブの群れと「倒れた何か」が見える。

クラブはこの時間になると泡を吹く習性があるのだとか。

「あれ？」

クラブの泡の向こうに見慣れないものが。

ゆっくりとそれに近づいていく。

先ほどは分からなかったが、うつ伏せでポケモンが、リオルが倒れている。

気を失っているのか、近づいてもびくりともしない。

「……………ねえ君、大丈夫？」

左肩をつついてみるが、反応はない。

どうしよう。このまま置いていけないし…………

「とりあえず……………よいしょっ！」

自分より少し大きいリオルを背負うのは骨が折れる。

「これ……………も、トレーニングのうち……………」

おぼつかない足取りで砂浜から去る。

そのとき一番星が、空でまたたきだしたのを、ピカチュウは気づかなかった。

寝ている間って素晴らしいよね！

身体がふわふわして宙に浮く感じで…………

「ねえ君、起きてよ」

うん？嫌だよ。

僕は寝ているのが好きだもん。

自分が自分じゃないような感じ。
これは最近覚えた不思議な感覚。

「もう……許してね、電気ショック！」

え？それってまさか

「うわあああ！？」

自分のわらのベッドで眠っていたリオルが目を覚ました。
なるほど、電気技は目覚ましに良いみたいだとピカチュウは考えた。

「あ、やっと起きた！君、大丈夫？砂浜に倒れてたから、てっきり
行き倒れかと……」

リオルが右を見ると、そこには小さな、そうは言っても自分と同じ
位の大きさのピカチュウが居た。

「はづ……？ピカチュウがしゃべってる！？」

「何をそんな不思議そうな言い方。君だってリオルなんだから、僕
の言葉くらいわかるでしょ？」

君だってリオルなんだから？

「リオルって、僕のこと？」

リオルははっきりとした口調でピカチュウに問う。

「君って変な人。ここはギルドの僕の部屋。今は一人で住んでるの」
怪訝そうなピカチュウが、鏡を見る？、とリオルに手鏡を渡す。

しゃべるピカチュウ？自分がリオル？ギルド？

そんなはずはない。

だって自分は…

「リオル、だ…」

鏡に写るのは、寝ぼけ眼の驚いた表情の若いリオル。

「ね。君はリオル。ひょっとして、記憶が飛んじやったりする？」

「あ、あのさ……いきなりこんなこと言っても、僕のこと信じてもらえないだろうけどさ……」

リオルの顔が引きつってるのが、ピカチュウの目に見えた。

「ん、なあに？もしかして本当に記憶喪失だったり」

ピカチュウは少し身構えていた。

「僕はコウ……人間なんだ。人間なだけで……」

結果は予想のはるか上であった。

「ええ！？じゃあ君は、コウは、気がついたらこんな姿ってこと？」
ピカチュウは、コウの事情を聞いていた。

コウは人間であること、そのこと以外の過去の記憶がないこと。

「うん……」

しよぼくれているコウの顔を見る限り、あながち嘘じゃないように思えるピカチュウ。

「そうなんだ……僕はトリル、見てのとおりピカチュウだよ」

そのピカチュウ、トリルがにっこり笑う。

トリルはね、このギルドのメンバーで、まだまだ新入りなんだ、と言葉を続けるトリル。

「トリルって不思議。自分のことを名前で呼ぶの？」

コウが微笑む。

「い、良いでしょっ。さっきはコウが怪しく見えたから、僕って言うっただけ」

本人も多少は気にしてるのだろうか、カクカクしたピカチュウらしい尻尾を左右に振りながら、照れた表情を見せる。

「それで、ここはギルド？だっけ」

コウが部屋を見渡す。
わらのベッドと小さな燭台、まん丸な窓。
それがこの、命の恩人の部屋であるようだ。

「トリル、行き倒…気絶してたポケモンはどうなんだ？」

その時、部屋の入り口に鳥ポケモン、ペラップが現れた。

今こいつ、僕のことを行き倒れとか言おうとしたよね？

……やなやつ。

コウは見ず知らずのポケモンに対して、早々と低評価を下した。

「あ、トーク、うん。どうやら、怪我はないみたい。でもね……」

トリルがコウの事情を、ペラップのトークに話した。

「ええっ！？人間だって！？……どうみてもリオルなのか？」

「僕だって好きでリオルになんかなってないよ」

さすがにムツときたコウはトークに言い返した。

「と、とりあえず、このままギルドに居るわけにもいかないし、
『親方』に相談だ」

親方？

偉い人かな？

「うん……じゃあついて来てコウ。ついでにギルドを案内するよ」

コウはトリルに手を引かれながら、トークの後について部屋をあとにした。

第1話：巡り会いは不思議で（後書き）

はい。

相変わらず短めですみません。

三人称視点とキャラの主観的な視点を混ぜた書き方をしてみたのですが、いかがでしょうか？

ご意見、お待ちしておりますm┐┐m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4104z/>

波紋の勇者Re:

2011年12月16日01時54分発行